

# 牛肉骨粉等の養魚用飼料としての利用再開(案)

## － 飼料に関するBSE規制の見直し －

- 1 これまでの経緯
- 2 利用再開の検討
- 3 まとめ

平成26年8月

## 1 これまでの経緯

# 我が国におけるBSE対策のポイント

1. と畜場における特定危険部位の除去
2. 肉骨粉等の牛用飼料としての給与を禁止する飼料規制の徹底
3. と畜牛及び死亡牛のBSE検査  
両検査によって汚染状況を正確に把握  
(飼料規制が適切に行われたことの確認)

3

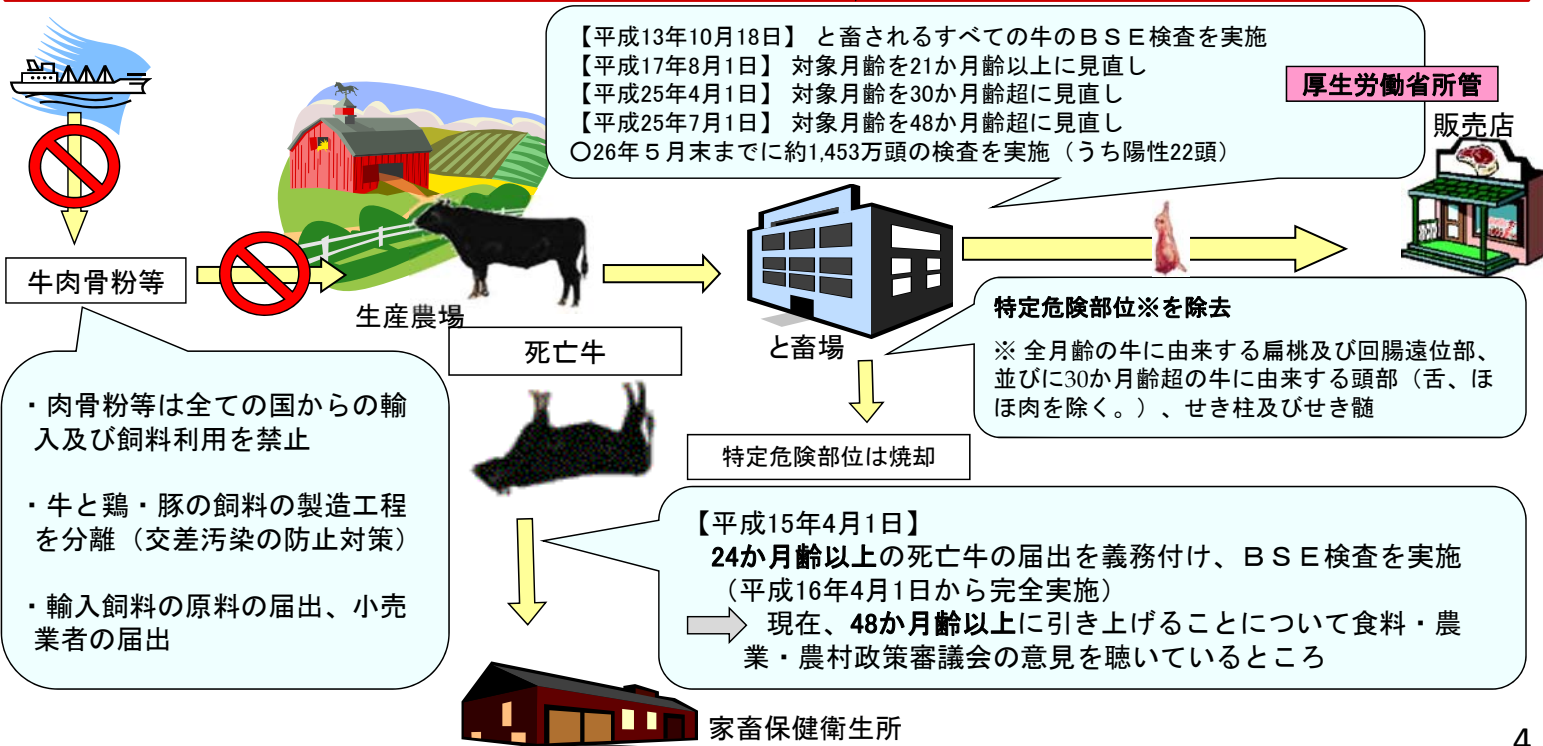
## 牛海綿状脳症(BSE)への対応

### 【厚生労働省】

- ✓ 厚生労働省において、と畜場における特定危険部位の除去及び48か月齢超のBSE検査

### 【農林水産省】

- ✓ 肉骨粉等の飼料としての給与を禁止する飼料規制の徹底 → 豚鶏由来の肉骨粉は、豚鶏魚用飼料への利用を再開
- ✓ 24か月齢以上の死亡牛についての届出義務とBSE検査 → 48か月齢以上への引上げについて諮問



4

# 飼料規制に関する基本的考え方

## 1. BSEの感染源となりうる原料の飼料利用を規制 【原料規制】

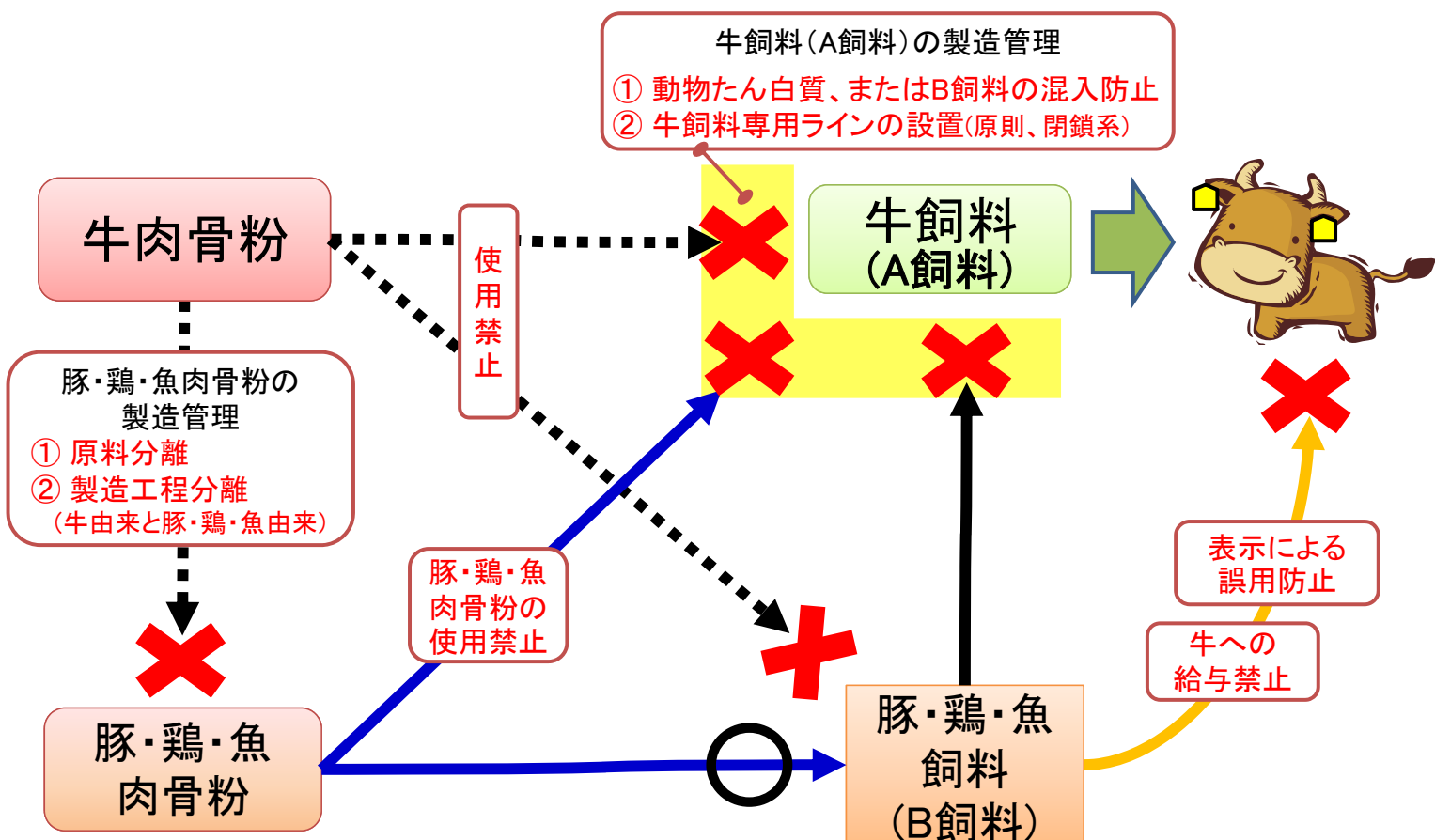
- 肉骨粉、魚粉、動物性油脂等の牛用飼料への利用禁止

## 2. 牛用飼料とその他飼料の分離(ライン分離) 【製造規制】

- 牛用飼料とその他飼料の交差汚染を防止するため、飼料の製造、出荷、運送、保管、給与の各段階において分離

5

### 牛肉骨粉の飼料規制の概要



6

# BSEの清浄化の進展

## 1. BSEの発生状況

- と畜牛や死亡牛の検査が実施されており、平成21年以降、5年間発生なし
  - ⇒ SRM除去や飼料規制の徹底により、BSEリスクは確実に低下
- 世界的にもBSE発生頭数は大きく減少

## 2. リスク評価

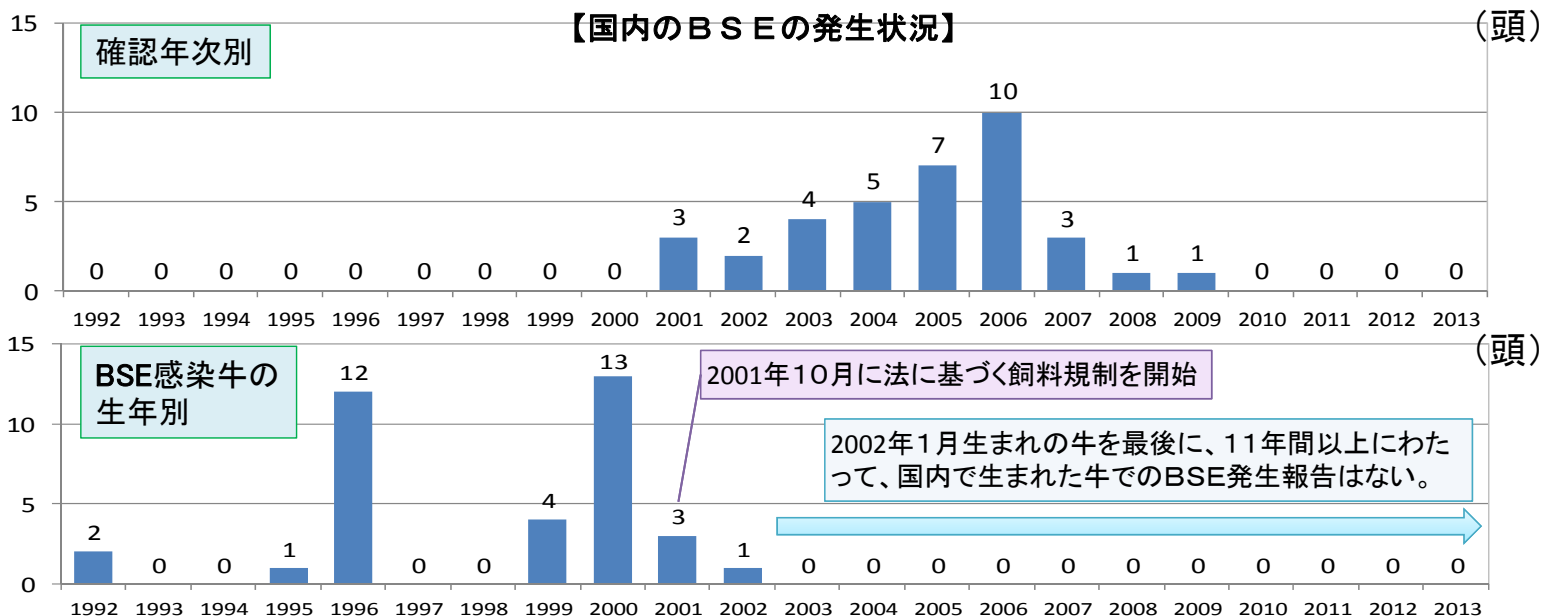
- 昨年5月、OIEにより無視できるBSEリスク国のステータスに認定

## 3. 飼料規制の遵守状況

- 飼料工場の製造ライン分離の規制を始めてから、牛用飼料への肉骨粉等の混入事例なし
- 農家が豚や鶏の肉骨粉を含む飼料を牛へ誤用・流用した違反事例なし

## 我が国におけるBSEの発生状況

- 2001(平成13)年9月に初めて確認。現在までにと畜検査で22頭、死亡牛検査で14頭(計36頭)が発生。
- 2002年1月生まれを最後に、11年間以上にわたって、国内で生まれた牛での発生報告はない。
- 昨年5月、我が国のBSE対策が評価され、OIEは「無視できるBSEリスク」の国に認定。




# 日本のBSEステータスの認定

- ・ OIE (国際獣疫事務局) は、申請に基づき、加盟国のBSE発生リスクを科学的に3段階に分類
- ・ 我が国は、平成25年5月、OIEの「無視できるBSEリスク」の国に認定

## ○ OIEによるBSEステータス区分と条件

ステータス	サーベイランス	リスク低減措置
無視できるリスク <small>平成25年5月認定</small>	5万頭に1頭のBSE感染牛の検出が可能なサーベイランス	① 過去11年以内に自国内で生まれた牛で発生がないこと ② 有効な飼料規制が8年以上実施されていること
管理されたリスク	10万頭に1頭のBSE感染牛の検出が可能なサーベイランス	有効な飼料規制が実施されていること
不明のリスク	上記のいずれにも該当しない場合	

「無視できるBSEリスク」の国ステータスについて



「これまで長期間にわたり飼料規制やサーベイランスなど、我が国の厳格なBSE対策を支えてきた生産者、レンダリング業界、飼料業界、と畜場、食肉流通加工業界、獣医師、地方行政機関等、皆様の不断の努力の成果であると思っております。」  
(平成25年6月4日林農林水産大臣記者会見)

「無視できるBSEリスク」の国認定証

# 飼料規制の遵守状況

## 1 FAMICによる牛用飼料の検査状況(牛用飼料への肉骨粉の混入の確認)

年度	平成22年度	23年度	24年度
検査点数	275	233	248
うち、違反点数	0	0	0

## 2 都道府県による農家段階の検査状況(牛への肉骨粉等の誤用の確認)

年度	平成22年度	23年度	24年度
検査箇所数	1,563	2,515	4,066
うち、違反箇所数	0	0	0

↓  
検査結果

- 製造段階において、牛用飼料に肉骨粉が混入するなどの違反事例なし
- 農家段階においても、牛に豚、鶏等用飼料や肉骨粉が誤用されるなどの違反事例なし

## 2 利用再開の検討

11

### 牛肉骨粉等の利用再開の検討

我が国のBSE発生リスクが大きく低下したことや以下の事項を踏まえ、養魚用飼料の原料としての牛肉骨粉等（原料としてSRM及び死亡牛を含まない）の利用再開を検討

1. 国際基準（OIE基準）では、牛へ給餌されないよう混入防止措置を求めているものの、牛肉骨粉等の豚、鶏及び養魚用飼料への利用を規制していない（米国、カナダ、豪州、チリ等でも利用）
2. 食品安全委員会において、魚を介してBSEプリオンが伝達・増幅することは困難と評価
3. 養魚用飼料が牛へ誤用・流用される可能性は極めて低い

（ 養魚用飼料は牛用飼料とは原料が大きく異なり、その臭いや形状も異なる。また、牛用飼料に比べ、3倍程度高価。 ）

12

## 肉骨粉等の用途別規制

由来動物		用途	飼料				(参考)肥料
			牛用	豚用	鶏用	養魚用	
牛	肉骨粉					○	
	肉粉、血粉	×	×	×	× → ○	※1	
	SRM※2				×	×	
豚	肉骨粉	×	○	○	○	○	
	肉粉、血粉	×	○	○	○	○	
鶏	肉骨粉	×	○	○	○	○	
	肉粉、血粉、羽毛粉	×	○	○	○	○	
魚	魚粉	×	○	○	○	○	




○： 利用可能  
×： 利用禁止

(※) 1 現行では、アルカリ処理した肉粉のみ利用可能  
その他のものは、利用再開の手段中(食品安全委員会の審議完了)

2 SRMの範囲：(全月齢)扁桃、回腸遠位部  
(30か月齢超)頭部[脳、眼など]、脊髄、脊柱

13

## 牛の部位を利用した加工たん白質の原料及び製造方法

加工たん白質の種類		原料	製造方法等
 牛肉骨粉	レンダリング工場の健康牛ラインで製造	食品として利用可能な部位(の残さ)： 肉、内臓、脂肪、骨、皮 ※SRM、死亡牛は含まない	原料を粉砕後、加熱・圧搾し、油脂を抽出した後の残さを乾燥・粉砕 当該ラインでは、豚・鶏・養魚用飼料原料として利用可能な油脂(不溶性不純物0.15%以下)が製造されており、肉骨粉は副産物
 牛血粉	レンダリング工場の肉骨粉とは別ラインで製造	血液	と畜時の血液を加熱・凝固させ、脱水・乾燥
 牛肉粉	食用油脂工場で製造	食品として利用可能な脂肪組織	原料を加熱・圧搾し、油脂を抽出した後の残さを乾燥・粉砕 (肉粉は食用油脂の製造時に生じる副産物)

14



## 主要国における飼料規制の概要

- ・OIE基準では、反すう動物(牛)の肉骨粉が牛へ給餌されないよう防止措置を定めているが、牛の肉骨粉を豚・鶏及び魚用飼料への利用は規制していない。
- ・米国、カナダ、豪州等では、養魚用飼料の原料として利用されている。

		家畜飼料の種類											
		日本			米国・カナダ			豪州			EU		
		牛	豚・鶏	魚	牛	豚・鶏	魚	牛	豚・鶏	魚	牛	豚・鶏	魚
肉骨粉の種類	牛	×	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×
	SRM <sup>※</sup>	×	×	×	×	×	×	—	—	—	×	×	×
	豚	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	○
	鶏	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	○

略号： ○：使用可、×：使用不可

(※) 日本：(全月齢)扁桃、回腸遠位部 (30か月齢超)頭部[脳、眼など]、脊髄、脊柱

カナダ：(全月齢)扁桃、回腸遠位部 (30か月齢以上)頭部[脳、眼など]、脊髄、脊柱

米国：SRMの定義はカナダと同じ(ただし、飼料用には30か月齢以上の脳及びせき髄のみ禁止)

豪州：SRMの定義はない(食品あるいは動物用飼料に利用可能)

EU：(全月齢)扁桃、腸 (30か月齢超)脊柱 (12か月齢超)頭部[脳、眼など]、脊髄

15

## 食品安全委員会における、豚肉骨粉の養魚用飼料への使用に関する評価(平成19年)

### 魚のTSEプリオンに対する感受性及び伝達性を確認

1. 魚が自然状態においてプリオンに感染し、増幅することは非常に困難
2. プリオンが増幅した魚をヒトが食品として食べること及び飼料を通じて他の動物に侵入・増幅することは非常に困難



## 養魚用飼料の特徴

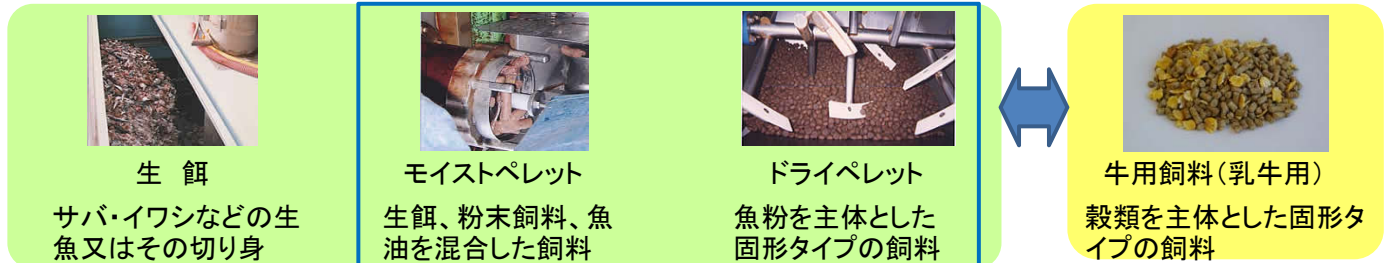
### 1. 原料

養魚用飼料は魚粉が主体であり、穀物主体である牛用配合飼料(約6万円/トン)の約3倍と高価(約17万円/トン)であることから、牛に流用する経済的なメリットがない

### 2. 形状

生餌、モイストペレット、ドライペレット(※)等で、牛用の飼料(牧草などの粗飼料、マッシュ等)とは大きく異なる

(※) 牛でもドライペレットが一部使用されているが、魚粉を主体とし、均一なペレットのみで構成される養魚用飼料に比べ、その形状、色やにおいては大きく異なる



### 3. 養殖魚と牛の兼業農家

都道府県及び農政局による立入検査等や飼料業者への間取調査からは、養殖魚と牛の飼養の双方を業とする経営体は確認されていない

### 4. 飼料の表示

養魚用飼料は、牛への給与を禁止する内容の表示がされている(今まで誤用された事例報告はない)

⇒ 養魚用飼料が牛に誤用・流用される可能性は極めて低い

17

## 牛肉骨粉等の養魚用飼料への利用再開に伴う新たな管理措置

### 1. レンダリング施設

- 死亡牛やSRMが牛肉骨粉等に混じらないよう、牛肉骨粉等の製造管理を規制(原料の分別収集、製造ライン分離、保管管理、供給管理票、表示)する大臣確認制度(※)を導入

(※) 既に同様のリスク管理措置を、動物用油脂の製造に係る大臣確認制度として実行済。また、平成26年1月の牛肉骨粉の肥料利用再開時にも大臣確認制度を導入済。

### 2. 飼料製造施設

- 牛肉骨粉等を原料とする養魚用飼料が、家畜(牛、豚、鶏)の飼料に混じらないよう、養魚用飼料の製造管理を規制(製造ライン分離、保管管理、表示)する大臣確認制度を導入

(※) 既に牛用飼料とそれ以外の飼料(豚、鶏、魚用)の交差汚染を防止してきたが、さらに、牛肉骨粉等を含む養魚用飼料とそれ以外の飼料の交差汚染を防止する規制を導入。

### 3. 養殖業者

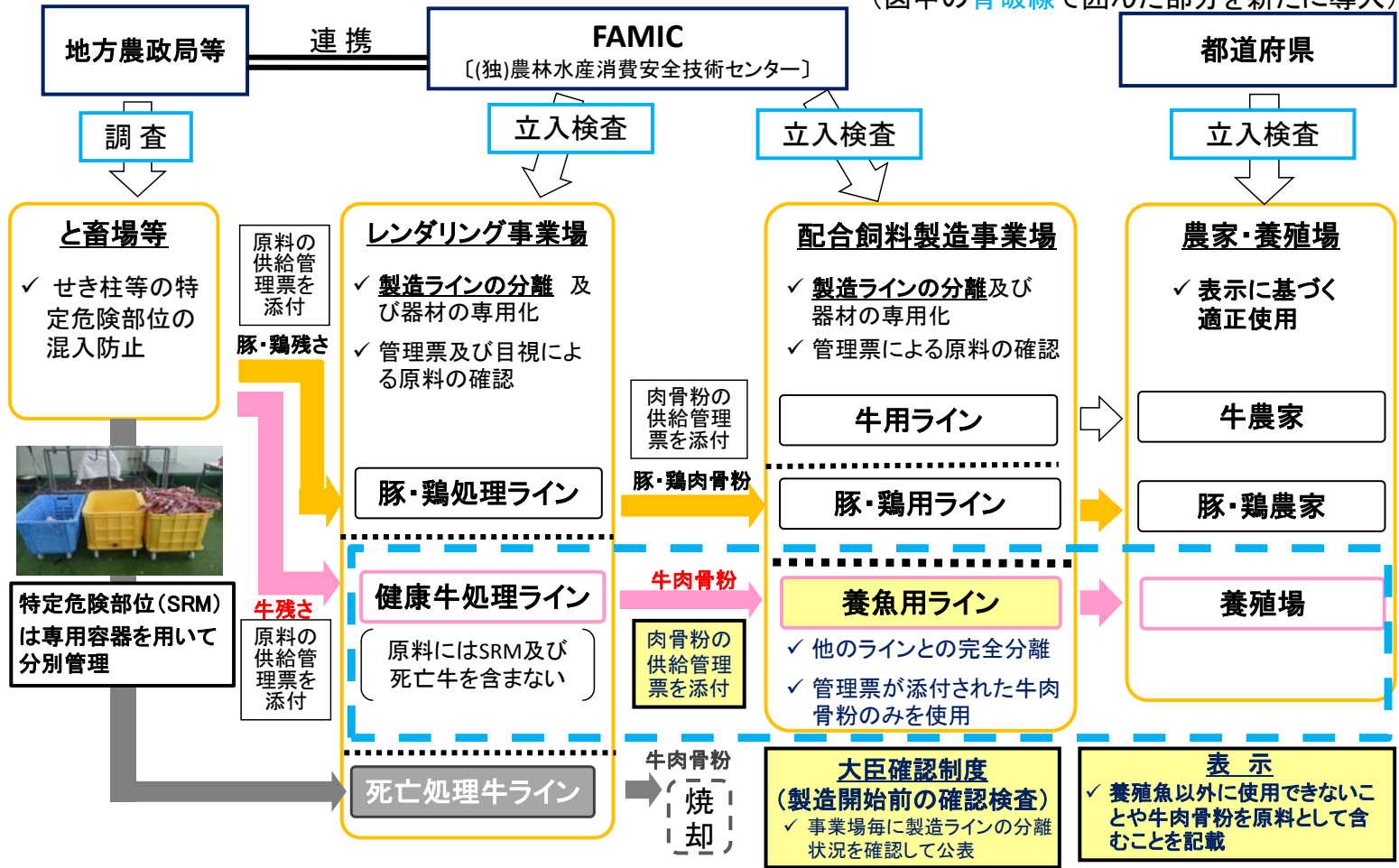
- 牛肉骨粉等を含む飼料は、養魚以外の家畜に給与禁止

(※) 飼料の表示や、都道府県等による牛農家の立入検査、注意喚起を実施。

18

# 利用再開に当たって導入する管理措置の流れ

(図中の青破線で囲んだ部分を新たに導入)



## 3 まとめ

1. 飼料規制が十分機能し、「無視できるBSEリスク」の国に認定されるまでにBSEリスクは大きく低下。牛肉骨粉自体の汚染の可能性は極めて低い上に、今後も飼料規制を継続していくことから、牛用飼料に牛肉骨粉が混入する可能性は極めて低い。
2. 牛農家において、飼料の誤用・流用の禁止等が周知徹底されており、牛が養魚用飼料を摂取する可能性は極めて低い。
3. 牛肉骨粉等(原料としてSRM及び死亡牛を含まない)の利用再開に当たっては、BSE発生リスクを高めることがないよう、養魚用飼料及び牛肉骨粉等の製造ラインの分離、使用上の注意の表示や関連事業者への立入検査などのリスク管理措置を導入。